

日常の歴史感覚を楽しみたい ～街づくり・居場所づくりにて～

241212to

1. はじめに

著者は、これまで中山間の「古民家と自然の保全(村・居場所づくり)」や平野部にある「街道宿場町の保全活性化(街づくり)」について10数年取り組んできた。街づくりでは、現存の伝統的建造物を中心に、文化財イコール歴史として活動している。中山間については、「古民家の古さは歴史なり」はそこそこにして古民家の風情や自然環境の堪能を目玉にしている。

しかしながら、何年も活動していると文化財的アプローチもいいが歴史にもっと向き合うことができるのではとか、来場者も確かに貴重な文化財に興味を示しているからここここに新たな歴史価値が付与出来れば御の字であろうとか、思いうようになった。

では当該地における新たな歴史価値とは何かと考えると、あるわあるわ。それは当該地に人が営んできた長い長い歴史である。が、そこでハタと困ったのは、ここでいう歴史の捉え方を普遍化し活用化することが果たして可能かどうか。

そこで考えたのは、歴史というものを今少し生活レベルまで接近させるといういわゆる足元の歴史という視点の導入である。ここでは、かかる視点の歴史を歴史感覚とすることにし、中山間や平地の街づくりにおいて歴史感覚がどのような様相にあり、皆さんがどう楽しんでいるかをつまびらかにすることにした。すなわち、身の間周りにおける歴史感覚を楽しみたく、対象を個人・家族、家(中山間)、街(平地街)に設定し、ここに日常の歴史感覚をエッセイとして論究することにした。なお、本稿のアプローチはこれまで大山歴民のレポートで扱ってきた市民感覚の歴史論の延長と捉えている。

2. 日常の歴史感覚について

(1)足元からの視点；

歴史の捉え方となると、歴史観・歴史意識・歴史認識・歴史感覚といった論議になるが、ここでごく普通の生活レベルで歴史に触れるするならば、「教わること」と「自らつくり上げること」の枠組みが設定でき、とりわけ作りあげの観点が重要と考える。これがあってこそ、日常において歴史が実感でき親近感が増す。

では、そのような視点からの歴史とは何か。それは、個人レベルの視点で足元(個人の歴史)をつくることであり、練り上げづくりだからこそ歴史が自分の関心事となっていくといえる。また、そのような見方で身の回りに着目し、日常の生活においても、歴史は生活の範疇に入っていることになると考える。

(2)足元と上部構造の二元

本稿では、足元としては、個人・家族を想定し、より広がった足元ならば街・

地域・組織とする。足元の上にあるいわゆる上部構造物は、都市であり、より大きな集合体(自治体・国・海外)である。

(3)二元論的な枠組み

なぜ二元としたのか。一元でもいいのではとの意見もあるが、すべては個人を基礎において市民の思考・行動に着目したいからである。もちろん、二元の各々が互いに作用しあっていることはいうに及ばないが、加えて市民が社会をつくり、社会の主人公と位置付けられていることを真っ先に考えている。

さらに言えば、近年の社会様相としては、全体(上部構造)が先行し、部分(足元)が全体に(物申すことよりも)合わせざるを得なくなり気味である。本来は部分と全体にはバランスあり、相互尊重あり。だからこそ二元論だと主張したい。

(4)足元における歴史の感覚が歴史感覚

a.一般には歴史感覚というと、歴史や歴史観を直感的に把握する能力といったことを意味している。しかしながら、二元論に立ってみると、足元のまわり(世界)における物事の動きの理解・解釈が生活の営みとなっていることに気づき、これを歴史的な気づきとか、(足元からの)歴史感覚や歴史感ということが出来る。

b.上部構造との関係では

足元の歴史感覚が種々の体験で作られ積み重なって次第に上部構造の歴史事象の理解・解釈となっていく。もちろん、(逆の場合として)上部構造から足元に影響を及ぼすこともあり、両者の間には相互作用があるといえる。

3. 足元の思考・行動

(1)個人レベル

個人でじっくりと考え込むことがあるとすると、それは将来計画立案の時であろう。その時には、これまでの自分や今の自分の歩みと現状をつぶさに考え、今までの勢いで突き進むにせよ、改善を加えるにせよ、過去をかなぐり捨て心機一転するにせよ、将来を立案することにより、自分というものを組み立てていることになる。これぞ、個人世界であっても社会全体のなかでの歴史的展開といえる。

(2)家庭レベル

家庭では、子どもの成長に合わせて生活様式の変遷があるので、時間的流れは身につまされるほど実感できる。親子関係に基づく家庭生活が社会的基礎実践そのものといえるので、歴史的な積み上げは個人レベル以上になる。

4. 足元の思考・行動、村や街にて

(1)村づくり・街づくりの現状

古民家や町家については、文化的価値が高いとして人気がある。これらの建物の今日的役割として課せられる機能には、過去の時代そのままを基調にして民芸品などを展示する博物館が一般的であるが、建物空間を利用(利活用)して家屋内

を商業、宿泊・研修、等の場に変えることも多い。さらに、個人・団体他の住宅・別荘として、家屋内をそのままにしたり、リノベをして使うことも多い。

(2)リノベもいいが住まう歴史を

上述のように種々の目的で使われている古民家や町家において、使う側は何に期待しているのでしょうか。その多くは当該建物の古さであり文化的価値である。価値とは建物が長年にわたり世の中に存続してきたという事実である。

しかしながら、これらの価値は当然にしても大事なことが欠け落ちている。それは、価値の基礎を形成するというならば、家屋内で居住してきた方々の長年の生活営みの蓄積である。

5. 居場所づくり、中山間にて、歴史が滲む家と自然

(1)概要

著者は、上市大岩の中山間にて10数年前から建築系の問題「村・居場所づくり」として古民家と周辺環境の一般公開・保存活動している。ただし、古民家は朝と夕方のみ有人管理で日中は無人管理である。

(2)歴史感覚が培われる環境

古民家では、建屋と家屋内をすべて(家財道具や設えを)そのままにしており、いわば建物内という空間においてこれまでの居住者の生活営みが満載となっている。このためか、訪問者が何の気負いもなくそこに居して楽しんでおられる。特に親子には、何の制約もなく、ただただのんびりとあるがままを楽しんでおられ、これぞ親子の居場所といた



いが、そんな言葉が不要なくらいに、大らかに体で居すことを堪能しておられる。そこには博物的、商業的な目的はなく、ただただ中山間の日常の漂いだけでいつでも堪能可能である。



写1 上：古民家外観 下左：和室・仏間 下右：台所

6. 街づくりや居場所づくり、市街地にて、歴史が文化財として地域に滲む

最近、市街地にも「もっと街づくりや居場所づくりを」のニーズがある。理由は、便利な平地に長く住んでいても感ずる生き難さへの改善要求にありと捉えられる。著者は、たまたま北陸街道滑川宿の街づくりに関わったことがあり、その経験をいかして街づくりにおける歴史感覚を見ることにする。

市街地にいると、昔というものはかけ離れた存在ではなく、より現代に接近した状態として映るので、歴史的建造物は別にして、今の視点で過去のものに対応し、古くなれば交換とか、撤収・廃棄とかがいとも簡単になされている。これがいわば街中での「古いモノ撤去」の歴史感覚といえる。

しかし、いったんモノの文化的価値が身近に感じられれば、話は別で、モノからは歴史を感覚的に捉えられる(認識)。そうすると、昔のモノはそこそこ手厚く大事にされる。となると、不動な歴史感覚が培われ難い現状においては、市民側の歴史感覚向上にむけて文化財というお墨付きが必要ということのようである。なお、街づくりにおいては、拠点が文化的に評価されると、その波及効果が拠点周辺にも広がっていくことにも着目しておきたい。

実は滑川の場合には、元本陣である旧宮崎酒造が歴史遺産になる前から、地域民は古いモノに一目置いていた。だからこそ、各家庭の古いものを旧本陣に寄贈していた。例えば、お雛様。いらなくなったお雛様を捨てるに捨てられずの方々には、寄贈可は大変喜ばれた。

こうしたことは全国にままある。岐阜中濃八百津町を例にあげる。木曾川の発電所新築に併せて旧発電所の再利用として 1995 年に開館した資料館では、旧発電機器の展示に加え、町の各地に眠る古い物品の展示もあり、地元の歴史遺産の日常閲覧は足元の歴史感覚育成に多大な貢献をしている。資料館は今なお健在である。



写 2 上；町家外観 下左；町家内部 下右；他町家

7. 村や街や屋内になぜ

老若(新旧、新古)が必要

(1)村や街、地域にて

最近、地域や街では、人間様は両若男女、すべからく自由平等をうたっているように、地域や街についても老若(新旧や新古)混在が前提である。なぜ古さ無視で新しさのみ居するのか。新たな開発がそうさせるのである。しかし、必要なのは老若である。なぜ古い建物を保存するのか、新しさは古さあつてのもの、古さは新しさあつてのもの、多様性とはそんな状態をいうのである。古さを伝統といって評価するならば、伝統そのものが新しさの中においてこそ、伝統の何たるかが伝わる。これが「古さ」の存在理由であり「新」に対しての責任といえる。

(2)古民家や町家では

古民家や町家では、博物館や商業空間への転用が多い。博物館は別にして商業施設はなぜ古い建物に触手を伸ばすのか。それは、建物に暖かさがあり、何か自然な感じがするからという。これは、現代の住まいと比較しての感覚的発言であり、単なる対比をいうと思われがちであるが、そこには昔の時代と現代の時代を天秤にかけ思考していることに他ならず、歴史の軸において思考が働いていることにもなる。もちろん、建物そのものが確かに歴史を刻んで成立していることもジンワリとした魅力となって漂っている。

(3)家屋内

新古のバランスは何も街や建物だけの話ではない。家屋内でも同じことがいえる。建物内に古い設えや家具もあれば新しいものもさり気なくあってもいい。今を生きる人が家屋に入るだけでも新古の枠内バランスがとれていると言いたい。

(4)我らの家屋(新家屋)

上述の論は、何も古民家だけではなく、我らの現代的な自宅においても形を変えて存在している。新家屋内の古いモノはそれこそ多数の新の中の古として歴史を感じさせ和まようし、自然志向の考えと相まって建物空間により奥みを増そう。

8. おわりに

著者は、中山間での村・居場所づくりや平地での街づくりにおいて、より活動を充実させるには文化財の他にも歴史感覚に迫る必要性ありと感じていた。これは、よく考えれば、市民が歴史をどう捉えるかという著者の長年のテーマそのものに行く突く。今回は、市民の立場にて理屈より感覚・感情を先行させた思考・行動ありと考えれば、歴史については歴史観を持つ前には歴史感覚(歴史感)があるということになる。このように歴史を考え日常における歴史感覚について、建築や個人レベルの行動の範疇に入り込み、その様相を垣間見た。結果を列挙す；

(1)歴史感覚は歴史認識のもとでの感覚として一般に捉えられているが、市民レベルでは認識ではなく感覚が先行するものである。これを足元からの歴史感覚とした。しかもそれらは、日常生活の営みのもとでの体験として積み重ねられ、時には認識に変わり、歴史論理へと進化するともいえる。

(2)歴史感覚は、過去の各種体験が結晶化し積み上がったものとして感覚的に認知され、楽しみへと転化もする。

(3)街や古建物・新建物、さらに家屋内において、さりげなく今昔なモノがありかつ自由な雰囲気があれば、歴史感覚が喚起される。その意味でも今昔なモードが今の社会にバランスよく備わっている(備わる)ことが必要といえる。現代住宅がたとえ粗末と言われる場合でも、粗末が歴史の奥みに変わることもある。

▲本稿は、市民の足元からの思考を基本としいるだけに、種々の思いが歴史感覚に現れて当然である。これが歴史感覚のニアンスの相違となって現れれば、それは多様な捉え方の結果といえ、足元思考のなせる業といたい。言いたいのは「もっと気楽になすがままに」である。

今後については、今少し枠を広げ、仕事や学業において感じる歴史を扱ってみたい。

▲謝辞；今回は感覚的な話が主である。中山間や平地の活動家各位に記して謝意を表す。